愛知教育大学教育創造開発機構紀要　vol. 5　pp. 185 ～ 193, March, 2015

Ai-Chinju Support Project 2014
―日韓単位互換授業「海外教育演習」の取り組み―

真島 聖子*　山根 真理**　梅田 恭子***　江島 徹郎***
上田 崇仁****　土屋 武志*　李 榮晩*****　姜 洪在*****

*社会科教育講座
**家政教育講座
***情報教育講座
****日本語教育講座
*****晋州教育大学校

Ai-Chinju Support Project 2014
―Trial of Compatible Credit Class 'Overseas Educational Practicum' between Sister Universities of Education in Korea and Japan―

Kiyoko MAJIMA*,　Mari YAMANE**,　Kyoko UMEDA***,
Tetsuro EJIMA***,　Takahito UEDA****,　Takeshi TSUCHIYA*,
Youngman LEE*****　and　Hongjae KANG*****

*Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
***Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
****Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
*****Chinju National University of Education, Chinju, 660-756, South Korea

Keywords：単位互換授業　多文化　教員養成

Ⅰ　はじめに

本稿[1] は、2014年5月13日から5月19日にかけて、愛知教育大学（以下、愛教大）と晋州教育大学校（以下、晋州教大）の単位互換授業として開講された「海外教育演習」[2] の実践報告である。愛教大と大韓民国の協定校である晋州教大は、1997年に交流協定を締結して以来、安定した交流を続けてきている。2004年に学生短期研修の相互訪問が初めて行われ、その後、受け入れ大学の大学祭期間である5月と9月に相互訪問する形が定着してきた。2014年度はこれまでの取り組みを発展させる形で、学生短期研修が単位互換授業の対象になり、5月には晋州教大の12人の学生が短期研修を集中講義の形で受講し、単位が認定された[3]。

本報告は単位互換授業「海外教育演習」の取り組みを記録する意図で書かれるものであるが、視点は短期研修に参加した晋州教大の「受講生」を受け入れる側である、愛教大スタッフの側に置かれている。両大学の学生短期研修はその初期から、受け入れ大学の学生がプログラムの企画・運営にかかわる形で行われてきた。2014年5月の取り組みでは、短期研修が授業になったことを機に、受講生である晋州教大の学生が学びの主体であり、受け入れ側である愛教大の学生は協定校の学生の学びを支える役割を担うことを強く意識して、担当教員が学生スタッフの組織、運営を支えてきた。「Ai-Chinju Support Project」は、晋州教大の学生を迎える側である愛教大の教員・学生スタッフの側が見た、2014年の取り組みに対する「愛称」である。Ai-Chinju Support Projectにおいて特筆すべきことは二つある。一つは、上述のように晋州教大の学生が学びの主体、愛教大のスタッフは晋州教大の学生の学びを支える役割を担うという役割関係が明確になったことである。二つ目は、授業化にともなって、授業の目的、内容、方法、評価等について、担当者間の議論を

積み重ねながら実施されたことである。以下に両大学初めての単位互換授業「海外教育演習」の取り組みをまとめることで、教育大学におけるカリキュラムのグローバル化を考えるための一助としたい。

Ⅱ 「海外教育演習」の概要

「海外教育演習」の目的は、以下のように設定された。「次世代を担う児童生徒の教育活動にかかわる教員にとって、自己の客観化と多文化に対する先入観や偏見のない姿勢を持つことは、必要な能力であり資質である。本授業では、他国・他地域の学校教育現場を知り、あわせて協定校の学生の協力を得てフィールドワーク（以下、FW）を計画、実施することにより、上記の能力・資質の育成を支援する[(4)]」。

「海外教育演習」の主要な柱は、学校現場における実践・見学およびFWである。学校現場における実践として、多文化共生を重視する知立市立知立東小学校において授業実践を行った。価値、文化の多元化が進む現代にあって、異なる他者への想像力や理解を深める力が重要であるとの認識に立ち、学校現場における実践・見学の目的は、「他国・他地域の学校教育現場を知ることにより、自己を客観化し多文化に対する先入観や偏見のない姿勢を持つ能力および資質を育成すること」に置かれた。FWでは、自ら設定した問いに対して協定校の学生の協力を得て、相互の対話や試行錯誤を通して一定の解答を得るという探究課題を設定した。この課題探究活動を通して、他国・他地域の社会・文化についての理解を得ることをFWの目的とした。

授業実践においてもFWにおいても、事前にEメールやSNSで両大学の学生同士が連絡を取り合い、晋州教大の学生の授業づくりやFWの計画に対して助言や提案をするなどの形で、準備段階から、両大学の学生同士の共同的な関係をつくることをめざした。

「海外教育演習」の単位認定上の評価は「合格／不合格」のみであるが、教員チームが設定した目的の達成度を確認し、学生自身の自己評価の目安にするために、ルーブリックを用いて評価を行った[(5)]。

「海外教育演習」の日程は、表1の通りである。

Ⅲ 授業実践

1 授業実践の準備

「海外教育演習」の主要な柱の1つである授業実践は、これまでの経験と反省から、準備段階において特に次の3点に重点を置いて取り組んだ。

第1は、晋州教大において、メンバー全員が納得いくまで授業を作り込み、指導案、教材、通訳も含めて、完成形まで仕上げておくことである。晋州教大の授業づくりの特徴は、2クラスの授業を共通のテーマ・内容･方法で実施する点である。12人のメンバーが1つの授業を完成させて臨むスタイルを貫いている。また、特筆すべき点として、愛教大から晋州教大に留学した2名の留学生の存在があげられる。この2名の留学生は、授業づくりや模擬授業に参加してアドバイスをしたり、晋州教大での授業準備の状況や指導案を愛教大の教員や学生に伝える橋渡しの役目をするなど積極的

表1 2014年の「海外教育演習」の日程

	第1日目 5/13（火）	第2日目 5/14（水）	第3日目 5/15（木）	第4日目 5/16（金）	第5日目 5/17（土）	第6日目 5/18（日）	第7日目 5/19（月）
9:10-10:40		③知立東授業見学	移動	⑪⑫奈良女子附属小学校見学	移動	ホームスティ	⑮名古屋フィールドワーク
10:50-12:20		④授業実践					移動
13:20-14:50	到着	⑤知立東反省会	⑧-⑩奈良フィールドワーク	移動	大学祭フィールドワーク		
15:00-16:30	移動	⑥⑦知立フィールドワーク		⑬反省会	ホームスティ対面式	⑭閉講式 1週間の振り返り 事後自己評価	帰国
16:40-18:10	①開講式 ・レクチャー（奈良女子の教育・フィールドワークについて・知立東） ・事前自己評価				ホームスティ		
19:10-20:40	②授業準備						

※網かけ部分が「授業時」として設定された時間帯である。授業実践やFWの準備、両大学学生を合わせたチームづくり活動、一般家庭でのホームステイ体験など、実際には研修のほぼ全過程が課題探究的活動にあてられた。なお、「大学祭フィールドワーク」は当初の計画にはなかったが、研修中に晋州教大の学生の要望を受ける形で旅程を調整し、組み込んだものである。

にサポートをして両大学のチームに貢献している。

第2は、「海外教育演習」の1日目（5月13日）の夜に、愛教大の教室で模擬授業を行い、授業の修正を行うことである。ここでは、実際の授業のように、クラスを2つに分け、晋州教大の学生が教師役となり、愛教大の教員や学生が児童役となって模擬授業に参加し、授業後、アドバイスやコメントをする。愛教大からは、教員5名、学生21名がこの模擬授業に参加した。両チームの教員と学生が共同して、よりよい授業を追究する大切なプロセスとして位置づけられる。

第3は、授業実践の受け入れ校との事前打ち合わせ、信頼関係づくりである。知立東小学校は、愛教大と知立市との包括協定の下、積極的に大学との連携・協力を推進している学校である。日頃から、大学と小学校が教育研究において協力し合い、信頼関係を築き上げてきたことで、晋州教大の学生との交流が知立東小学校の行事の1つとして位置づけられるようになった。つまり、この授業実践は、単なる一過性の授業ではなく、地域の小学校の教育活動にまで深く根付いた教育実践となっている点でも重要な意味を持っている。

以上のように、「海外教育演習」の授業実践は、晋州教大と愛教大の教員、学生、留学生、さらには、地域の小学校との連携、協力の上に成り立っている。

2　知立東小学校での授業実践

授業実践の受け入れ校である知立東小学校は、2014年度の重点努力目標として、「確かな学力」、「共生・連携」、「健康・安全」を掲げ、子どもや家庭、地域とともに歩みながら、夢を語り合える学校をめざして、キャリア教育を基盤にした教育活動を推進している。知立東小学校の児童数は303名で、その内、外国籍児童は172名であり、全体の56.8％を占めている（2014年4月7日現在）。

このような特色を持つ小学校での授業実践は、「他国・他地域の学校教育現場を知ることにより、自己を客観化し多文化に対する先入観や偏見のない姿勢を持つ能力および資質を育成する」という「海外教育演習」の目標にも合致する。

「海外教育演習」の2日目（5月14日）に知立東小学校に訪問し、学校の概要説明、授業参観を経て、授業実践、交流活動、授業反省会を行った。今回、知立東小学校には、晋州教大の教員2名、学生12名、愛教大の教員3名、学生16名、総勢33名が訪問した。

授業のねらいは、円陣を組んでカンガンスーレと歌いながらぐるぐる踊り舞う「カンガンスーレ」（韓国全羅南道地方の伝統的な踊り）を通して交流を深めることである。また、授業の構成は以下の通りである。

①自己紹介をする。②韓国について紹介する。（地図で韓国と日本の位置を確認、韓服・キムチ・歌手・伝統楽器を紹介）③カンガンスーレの寸劇を披露して、月に願い事をする遊びの意味を理解させる。④カンガンスーレの遊び方の手本を見せる。⑤カンガンスーレの歌を練習する。⑥願い事を書いて月に貼る。⑦円を2つ作り、2、3回練習した後、音楽に合わせてカンガンスーレを踊る。⑧最後は、円を1つにして全員で、音楽に合わせてカンガンスーレを踊る。⑨授業の感想を伝え合う。⑩授業のまとめをする 。

クラスの半数が外国人児童である知立東小学校の特性を踏まえ、すべての児童にとってわかりやすい授業となるよう、上記のような10のスモールステップでの授業が構成された。この他、具体物の提示、音楽や身体での表現、発問や指示の明確化、全員が参加できる授業内容など、様々な工夫がなされた。

実際の授業では、一つひとつの発問や指示を分かりやすく丁寧に伝えたり、児童の状況に合わせた声かけを行うなど児童に寄り添った授業展開となっていた。

3　授業実践の課題

授業実践の課題は、主に2つある。

第1に、本授業において、何が成果で何が課題なのかが明らかになっていない点である。授業に至るまでの準備には、時間と労力をかけ取り組んできたが、参加した子どもたちの変容を観察、調査して、本授業の目標、内容、方法について具体的に評価し、成果と課題を明らかにするところまで至らなかった。

今後は、授業評価にも力点を置き、授業反省会の在り方を改善してより協議会に近い形で臨む必要がある。授業評価を踏まえた上で、自己評価を行い、授業実践を通じて、自分自身が何を学び、どのような認識の深まりが見られたのかを確認する必要がある。

第2に、愛教大のサポートチームの位置づけである。「海外教育演習」1日目の愛教大における模擬授業では、児童役となって模擬授業に参加し、アドバイスやコメントを伝えるなどして、授業改善に一定の役割を果たした。しかし、2日目の知立東小学校での授業実践・授業反省会では、「彼らのサポートというより、自分自身の基礎実習と言うようなスタンスで臨んでしまった」、「知立東小学校の外国人の子どもについての知識が少なかった」、「知立東について、事前に公式HPにて学びましたが、有効に活用できているか自信がありません」というような意見が、愛教大の学生の自己評価シートに見られた。ここから、①知立東小学校の教育方針や児童理解の不足から、②授業実践で何をサポートすべきか不明確となり、③受身的な態度での授業参加に至ったと考えられる。

改善の方策としては、事前に愛教大のサポートチームの学生を引率して知立東小学校へ訪問し、学校の教育方針や児童理解について学習をし、自分なりの問題意識を持たせ、授業を実践する上での課題を把握させることが考えられる。あるいは、「海外教育演習」の講

義の1つに、「外国人児童支援」に関する内容を組み入れ、授業を実践する前の段階で、晋州教大の学生と愛教大の学生と共同で学ぶ機会をつくることも考えられる。

Ⅳ　フィールドワーク

1　FWの過程

FWは旅程全体に断続的に組み込まれている。愛知県知立市、奈良市、名古屋市のFWは地域社会･文化探究編、「授業時」としては組みこまれていないが、ホームステイを通したFWは生活文化編に位置づけることができる。

FWの過程を以下のように計画した。①FWの概要と事前課題を晋州教大の指導教員にEメールで送付し、研修参加学生に課題の提示を依頼する。(4月上旬 課題：「海外教育演習」におけるFWを通して、あなたが「日本の社会・文化」について発見したいこと、考えたいことを「問い」の形であげてください。「問い」にかかわって行きたいところ、やりたいことがあれば、それもあげてください。)②各学生のFWにおける「問い」をまとめ、指導教員を通して提出する。(4月中旬) ③受講生の「問い」を授業担当教員、サポート学生で共有した上で、愛教大のサポート学生は、晋州教大の学生が「問い」を解くために適切なFWの行先、方法について提案する。(4月末) ④　③の提案に対して晋州教大の学生が応答をする。その応答をふまえてFWの行先、方法が決まる。(5月初旬) ⑤FWを実施する。(現地でFWの行先、方法を変更してもよい。) ⑥FWを通して、当初に設定した「問い」に関してわかったこと、考えたことを発表する。

2 「問い」の設定とFWの計画

当初の課題設定に対して、まず送られてきたのは「日本の真の姿」という大テーマと「食べ物、住まい、お風呂、伝統衣装、交通、文化財、娯楽、教育、家庭、お酒」などのトピックであった。課題設定の意図が正しく伝わっていないことに気づいた愛教大側の担当者は急遽、晋州教大の12人の学生宛にFWのために準備してほしいのはテーマではなく「問い」であることを伝える英文のメッセージを書き、晋州教大の指導教員を通して学生たちに伝えてもらった。それに対し、晋州教大の指導教員から「具体的な問いになるほどその面白さは減少するのではないか」という疑問が投げかけられ、それに応える過程の中で、「問い」の意図や意味が明確になった。暫定的なものであっても「問い」は必要であること、大きなテーマとのかかわりで、どのような具体的な活動や探究方法が適切なのかを考える手がかりになること、どのような「問い」が立てられているかは、サポート側の学生が助言をする上で重要

表2　Ai-Chinju-Support Projectの担当学生が考えた奈良FWの計画

班名	晋州の学生の「問い」にかかわるテーマ	班のFWテーマ	行先と活動内容	テーマ、行き先等の決定理由
A	食べ物 遊び 住居	食文化	喫茶去庵での茶道体験 東大寺	・指導員が並んで手前をしてくれるので手本を見てお点前ができる。 ・一つの作業が終わる毎に指導員が一人一人の状態を確認し、必要があれば手直ししてもらえる。 ・一つ一つの所作の理由まで説明してもらえ、日本の茶道そのものだけでなく茶道文化を学ぶことができる。 ・世界遺産である。
B	大学生活 家庭生活 酒文化	伝統文化	喫茶去庵での茶道体験 東大寺	・チームのメンバーがあげた問いは奈良でのFW以外の活動で発見すべきものと考えたため奈良でしか体験できない日本を体験してもらおうとテーマを「伝統文化」にした。 ・茶道体験では、わびさびの心、日本の礼儀、姿勢を感じてもらえるのではと考えた。 ・奈良を象徴する歴史的建造物である。
C	伝統衣装 家 遊び	文化財	奈良きもの芸術専門学校 興福寺 東大寺	・着物が展示され体験もできる。 ・世界遺産である。
D	娯楽文化 茶道文化 酒文化	伝統衣装	東大寺 喫茶去庵での茶道体験 奈良きもの芸術専門学校	・着物の説明、体験などを通して日本の伝統衣装について学ぶ。 ・伝統衣装というテーマを皮切りに文化を体験し、日本を感じてもらう。 ・多角的視野で日本を感じてもらう。(お点前体験、東大寺)

※担当学生が作成した奈良FWの報告基づいて作成したものである。

であること、FWの現場で新たな疑問が生じたら、「問い」を変えてもかまわないことをメールで伝え、両大学の教員、担当学生間で共有した。

以上の過程を経て、晋州教大の学生から出された「FWで解きたい問い」は、以下の通りである。

①日本の食文化の中で、他の国と違うところや、外国人に紹介したいことは何か。②愛知県の名物の食べ物は何か。③日本の茶道文化はどのようなものか。④日本の「酒の席」の文化はどのようなものか。⑤日本の「酒の席」での礼儀、日本人が好きな酒は。⑥日本の大学ではどんな授業と部活が行われているか。⑦日本の大学生は余暇の時間に何をして遊ぶか。⑧日本の人たちは年齢によって娯楽文化がどのように違うか。⑨着物の種類と各部分の名称、着る順序はどのようになっているか。着物に対する日本の人たちの考えはどのようなものか。主にどのような時に着物を着るか。⑩韓国は文化財の管理がうまくできていないと評されているが、日本は文化財管理がうまくいっていると聞いた。文化財をどのようにうまく管理するのか知りたい。⑪アジア文化圏では家父長的雰囲気が伝統的に形成されているが、日本の家族の雰囲気はどのようなものか。⑫日本の「住居」といえば伝統家屋にある畳が思いつくが、畳にはどんな効果があり、畳はなぜ生まれたのか。

表2は、愛教大の学生が考えた奈良FWの計画である。全旅程に組み込んだFWのどこかで各学生の「問い」を探究する時間と方法が考えられている。奈良FWでは「問い」にかかわる活動は計画されていない班もある。しかし、愛教大の学生は総じて、晋州教大の学生の「問い」を受けとめた上で、「問い」を探究するFWをどこに位置づけるか、探究テーマや「問い」とのかかわりでどのような活動を計画するかを考え、提案したと考えられる。

3　受講生の「発見」

ホームステイから戻ってきた6日目の午後に閉講式を行った。その際、「FWの体験から発見したこと」について、両大学の学生が発表する時間をとった。以下、晋州教大の学生の発表内容について要約的に述べる。

多くの学生は、自分の探究テーマについて「違い」および「共通点」という言葉で表現した。「違い」については、「韓国では音をたてないで食べるが日本では音をたてて食べることがある」「酒を飲むとき、韓国のように目上の人の前で顔をそむけることをしない」「ゲームセンターで怖そうな人が一人でゲームをしていた。遊びは一緒にするものと思っていたので驚いた」「日本の学生にはアルバイトをして親から金をもらわず自立している人がいる」「日本の家は大きな建物の中に小さな空間がある」など、各自の探究テーマに即して、具体的な体験を通した発見が述べられた。

共通点については、探究テーマに即した発言と、ホームステイなどを通した人間関係について述べた発言があった。探究テーマに即した発見としては、「酒を注ぐとき、日韓ともに両手を用いる。伝統衣装に袖があるためではないか。」「日本の人々の余暇時間の過ごし方は韓国と違いがない」「寺、神社などの文化財は韓国と似ている」などがあった。人間関係に関する発言としては、「国籍は違っても子どもたちは同じ」「家族の心の温かさ」などが語られた。

学生の発表の後に、教員からコメントが述べられた。愛教大の教員からは、「違い」について、良い悪いの価値判断を行なう危険性があること、「同じ人間」であるとの認識が「同じ人間なのになぜ、わからないのか」という方向に働く危険性があることが語られた。晋州教大の教員からは、自分の経験を一般化することの危険性、「伝統的文化」については今後の勉強が必要であることが指摘された。

4　FWの成果と課題

2014年度の「海外教育演習」の中で、FWについて、目標や内容を明確にして学生に伝え、それをプログラムの中に組み込んだことは、前進であった。今年度のFWは、晋州教大の受講生がテーマと問いを持ち、愛教大の学生がその問いに応じたFWを提案し、相互作用の中でFWを作っていくように計画した。開講式、閉講式の場でFWの「問い」と「発見」を、愛教大の学生、両校の教員の前で発表する時間を持つことで、FWの目標、テーマと「問い」、それに関わる「発見」について意識化し、共有を図った。「問い」を持つことで、本人が課題を意識してFWを行ったこと、愛教大の学生たちがFWの計画の提案を適切に行ったこと、FWを通した発見を言語化し共有できたことは、一定の成果であった。FWの取り組みに関する今後の課題は、二つある。一つは、「問い」を持つことの意味についてである。「問い」を持ってFWを行うことで、経験の意識化、言語化を図ることができるのだが、「問いに縛られること」の危険性が無いとは言えない。受講生の中には「酒文化に関する問いを立てたが、ホームステイ先が酒を飲まない家庭だったので十分な探究ができなかった」と語る学生もいた。「問い」は「問題意識」を持つ手段であること、FW過程の中で「問い」は変更してもよいことは、事前に伝えてあった。しかし、学生が十分に理解するのは難しかったようである。「問い」を持つ意味を適切に伝えること、FW過程での柔軟な活動と思考を促すことは、今後の課題である。

二つ目は、「海外教育演習」全体の中でのFWの位置づけについてである。「海外教育演習」の中で授業実践とFWを2つの柱として位置づけたが、小学校での授業実践と並行してFWの計画、準備を進めるのは、受

講生の事前課題として、やや過重であったと考えられる。「海外教育演習」全体の中でのFWの位置づけ、さらに授業実践とFWの関連について、明確にしていくことが課題である。

Ⅴ　評価

1　評価の方法と概要

単位化にあたり、海外教育演習の目的、内容、方法、評価をスタッフ全員で検討をした。本章では、評価部分について述べる。

本演習の目的はⅡ章で述べた通りである。その上で、本演習の主要な柱となる、学校現場における実践及び見学とフィールドワークの目的を下記のように定めた。

学校現場における実践及び見学に関する目標：現代は価値や文化の多元化が進んでおり、異なる他者への想像力や理解を深める力が重要である。他国・他地域の学校教育現場を知ることにより、自己を客観化し多文化に対する先入観や偏見のない姿勢を持つ能力および資質を育成する。

フィールドワークの目標：自ら設定した問いに対して協定校の学生の協力を得て、相互の対話や試行錯誤を通して一定の解答を得ようとする活動を通して、他国・他地域の社会・文化についての理解を得る。

これらの目標に対して、どの程度到達しているのかを測るために、規準と基準を作成し、表3や4のようなルーブリックを作成した。そして、海外教育演習の事前と事後で、このルーブリックによる自己評価を学生が行った。愛教大の学生、晋州教大の学生が共に自己評価を行ったが、ここでは、晋州教大の学生の評価についてのみ取り上げる。晋州教大の学生は英訳されたルーブリックを用い、回答の言語は韓国語、英語、日本語のいずれかで答えた。

2　晋州教大の学生の自己評価

晋州教大の学生12名が事前・事後ともに自己評価を行った。ただし、事前調査については時間が少なく、その場で全員の回収ができずに、知立東小学校での授業後に書いた学生が5名いる。そのうち3名は学校見学についての評価の理由が知立東小学校での実践の反省になってしまっている。次回からは事前と事後に自己評価をする時間を確保することが必要である。

学校見学について、晋州教大の学生に示されたルーブリック（表3）を見ると、「内容理解」と「子ども理解」がどの程度できているかが観点となっている。そしてそれらに対する「自分の考えや学びをテクスト化できるか」どうかを問うている。それにS評価になると「メディアや教材の取捨選択」が加わっている。

事前は基準A（内容理解が自律的にできる・子ども理解への努力・学びについてもテクスト化ができる）と自己評価した学生が6名、基準B（内容理解への努力・子どもとのコミュニケーションへの努力・気持ちについてテクスト化できる）と自己評価した学生が6

表3　晋州教大の学生の学校見学のルーブリック

S	A	B	C
伝えたい内容を自ら明確にし、メディアや教材を取捨選択して取り組むことができている。 また子どもたちの背景や状況を理解し、言葉でのコミュニケーションが不十分であっても、ある程度の理解ができている。 また子どもたちや自らの学びを評価し、客観的に見ることができている。	伝えたい内容を理解し、熱意を持って自律的に取り組むことができている。 子どもの状況を理解しようと努力している。 自らの学びについて、自らのテクストでまとめることができる。	伝えたい内容を理解しようと努力している。前向きに取り組むことができている。 言葉や態度を通して、子どもとのコミュニケーションをめざしている。 自らの気持ちについて、適切なテクストでまとめることができる。	伝えたい内容に対する興味・関心が低い。受身の姿勢で取り組んでいる。 子どもとのコミュニケーションが表面的である。 また自らの学びや気持ちについて、適切なテクストでまとめることができない。

表4　晋州教大の学生のフィールドワークのルーブリック

S	A	B	C
「日本の社会・文化」について発見したい、考えたい「問い」を設定し、協定校の学生と「他者性」を意識したコミュニケーションをとりながら、「問い」を解くために適切なフィールドワーク（FW）の行先や方法を決めることができる。 FWを通して「問い」に対する一定の解を得、さらに深く探究したい「問い」をもってFWを深化させ、それらのプロセスと発見を言語化することができる。	「日本の社会・文化」について発見したい、考えたい「問い」を設定し、協定校の学生とコミュニケーションをとって「問い」を解くためのFWの行先や方法を決めることができる。 FWを通して「問い」に対する一定の解を得、それを言語化することができる。	日本の社会・文化」について発見したい、考えたい「問い」を設定し、協定校の学生とコミュニケーションをとって「問い」を解くためのFWの訪問先や方法を決めようとする。 FWを通して「問い」に関連する理解を深めようとする。	「日本の社会・文化」について発見したい・考えたい「問い」を設定することができない。「問い」を解くためのFWの訪問先や方法を決め、FWを遂行するにあたって、協定校の学生とコミュニケーションをとろうとしない。 FWを通して「問い」に関連する理解を深めようとしない。

名であった。Aと自己評価した学生の理由を見ると、「私は一回の教育実習を経験し、それ以外の何回かの経験を通して実際の教室での授業をしました。その授業が決して完璧だとは言えませんが、何回かの試行錯誤を通して、さらに効率的な授業の伝達方法と子供たちとの疎通方法を理解したと思います。今回の授業実習を通して他の言語・文化を持つ小学生と共感する方法を学びたいです」のように内容理解に取り組む姿勢や、子ども理解に対する抱負をあげている学生がほとんどであった。一方、Bと自己評価した学生の理由を見ると、「2回の小学校訪問実習で授業について多くの考えを持つようになりました。自信がある部分もありますが、私が捉える授業に対する観点に問題が多いということに気づき、その解決方法を見つけるために努力しています。現在の課題は授業に対しての理解、戦略、ノウハウが未熟なことです。今回の日本文化交流研修を通してその道を見つけようと思います。何よりも自信を持ちたいです」のようにこれまでの晋州での教育実習の経験を持っているが故の難しさを書く学生が2名、「私たちが行く小学校は多文化や学生中心等それぞれの特徴がある所だと聞きました。だからこそ私たちが知っている韓国の小学校の姿とはだいぶ違うだろうと思います。今回行く学校や日本のシステムはあまり知りませんが、私は子どもが好きですし、将来の教育者なので、興味を持って熱心に授業と参観をする準備ができています。楽しみですし、頑張っている韓国の先生として、小学生たちに覚えてもらうことを目標にして頑張ります！」のように抱負を書く学生が2名、その両方を書く学生が1名であった。

それに対して、事後は、Aと評価した学生が9名、Sと評価した学生が3名いた。つまり、全員が内容理解を自律的にでき、子ども理解への努力を行い、自分の気持ちだけでなく学びについてもテクスト化できたと自己評価している。それらの理由を見ると、「授業を通して私が感じたことは、日本も韓国も小学生は特に違いがないということでした。日本の子どもたちと言ってもほんの少しの違いがあるだけで、みんな同じ小学生だと分かりました。授業を通して子どもたちの行動、勉強する環境を理解することができ、生涯再びないかもしれない経験ができて本当に良かったです」のように子どもに違いはないという理由を挙げた学生が5名と最も多かった。また、「最初に知立東小学校と奈良女子大学附属小学校での経験を通して本当に多くの経験をしたと思います。多文化時代に進む現代に知立東小学校の教育運営方式とシステムは新しい衝撃であり、学生中心で授業を進行できる奈良女子大学附属小学校では、新しい教育方式に覚醒しました。実はこのような教育方式があるということは大学の勉強を通してよく知っていたことでしたが、現実的に適用するには多くの障害があります。しかし先生の情熱があれば、少しそれに合わせることはできなくても、困難を克服することができるという事実が分かるようになりました」のように授業を見学した二つの違いを挙げた学生が3名いた。一方、Sの規準に書かれているメディアや教材の取捨選択については述べられているものはなかった。

以上から、子ども理解に関しては、異なる他者への理解を深め、偏見のない姿勢を持つ能力を育てられたのではないかと考える。一方、内容理解については、特徴のある異なるタイプの学校を見てその違いがインパクトを与えているようであった。ただし、これは表面的にとてもわかりやすく目に見えることでもある。今後は、一般校の見学についても検討する余地がある。

FWについてのルーブリック（表4）を見ると、「問い」の設定ができるか、その「問い」を協定校の学生とコミュニケーションをとって方法や行先を決めることができるか、FWを通して「問い」に対する理解度と言語化の程度が示されている。そして、基準Sになるとこれらに社会文化的な違いへの意識、つまり「他者性」を意識して「問い」の設定やコミュニケーションがとれることが加わる。

事前はA（「問い」の設定ができた・コミュニケーションをとって行先や方法を決めた・FWを通して一定の解を得て言語化できる）と評価した学生が6名、B（「問い」の設定ができた・コミュニケーションをとって行先や方法を決める努力をした・FWを通して理解を深めようと努力できる）と評価した学生が5名、そしてSを選んだ学生が1名であった。

事前でAと答えた学生の理由としては「私は日本の酒文化と礼節について学ぼうと思います。また、由来と歴史があり固有の伝統があるので、それについて多く学ぼうと思います。特に、日本の様々な酒の種類と特徴についても気になり、知りたいです」のように具体的に「問い」をあげる学生は多くいたが、愛教大の学生とコミュニケーションをとって方法や行先を決めることができたかについては、今後の抱負を述べる記述は見られるものの、実際にコミュニケーションをとって行先と方法を決めたというような記述はなかった。上記Ⅳ章にあるように事前にやり取りしていることが十分には活かされていないことがわかる。また、Bと答えた学生の理由の中には、「実は日本に初めて来て、慣れない環境でどうやって準備するべきかとても悩みました。『初めて』ということが私に楽しみと怖さの両方を与えました。そのため、ある程度の関心を持ち、努力しましたが、準備の過程で最善を尽くせなかったので理解しづらかったです。私の日本に来るという嬉しさと期待によって、準備を疎かにしたのではないかと反省しています。これからの日本での日々が私の態度を変えると確信しています」のように日本の文化についてよく知らない、言葉が話せないなど不安を述べ

る学生が3名いた。

事後の自己評価は、Sが5名、Aが5名、Bが2名であり、うち6名が事前に比べて上昇し、5名が変わらず、1名が下がった。多くの学生が「私たちの主題は住居環境で、フィールドワークでは多くの事を学ぶことはできませんでしたが、ホームステイで多くのことを学びました。フィールドワークの感想を言います。フィールドワークを通して目的地だけではなく移動して、そこで愛教大の学生と話をする過程自体が全て経験となり、知識となりました。ここで日本の真の姿について一歩近づきました」のように一定の解を得ることができたと答えている。しかし、反省会で晋州教大の教員からこの7日間で学んだことがすべてではないという指摘を受け、「日本の文化と社会について私の知りたいことを明らかにする方法を見つけることができたと自信を持ちました。その理由は次の通りです。私は7日間経験した日本の姿から、違いを発見しようと絶えず努力しました。しかし、反省会をした後、狭い考えにとらわれて問題を解決しようとしたために、結果的にそれが一般であるという考えを持つ誤りを犯していないかと反省するようになりました。みなさんから様々なコメントをもらった今は、私の間違った考えと問題点を見つけたため、正しい方法で問題を解決できたのではないかと思います」という理由付けや、「『問い』を調べ、『問い』についての答えを探す過程で多くのことに気づきました。まず、韓国と日本の違いや共通点に注目することよりも、日本で会った人と日本での経験を通して分かり合う時間を持てたということ自体に意味があったと思います。したがって、『問い』を立て、その『問い』についての答えを探すよりも『問題意識』を持つべきだということに気付きました。重要なことは過程であり、私の経験とここでの時間が重要な自信として残り、これからの人生にも大きな助けになると信じます」というように、問題意識を持つことが大切であるということに気付いたという学生もいた。最後に学生の意見を共有したことで、さらに深化した考えを持つことができたと考えられる。

3 評価を行っての改善点

今回初めて評価を言語化した。これは学生にとっても、教員側スタッフにとっても、目標を明確化し、学びを言語化し、成果を視覚化する上でも一定の成果があったと考えられる。一方で次年度以降に向けての課題も得られた。

まず、ルーブリックの規準と表現の難易度が高いと考えられる。語彙も難しく、また複数の項目が1つに入っており、学生にとって難しかったのではないかと推測される。例えば、表4の基準Sの「他者性」という意味も、英訳する過程で「社会文化的な違いへの意識」とした。このようなルーブリックの平易化や分化が必要である。さらに、特に学校見学において、愛教大の学生と晋州教大の学生のルーブリックの間に、子ども理解の観点とメディアやリソースの活用について、不一致がみられる。これらのことを再度検討し、ルーブリックの改定が必要である。

次に、自己評価の時間の確保である。開会式の最後、閉会式の最後に位置づけられ、時間が押して事前も事後も自己評価を行う時間が削減された。ルーブリックの中に、「自らの学びをテクストでまとめることができる」「FWの解を言語化することができる」とあり、そのまさにテクスト化、言語化する時間の一つが自己評価であると考えられる。次回は自己評価を行う位置づけも考え、しっかりとした時間の確保が必要であると思われる。

Ⅵ おわりに

Ai-Chinju Support Project 2014では、これまでの学生交流を単位互換授業として正式に位置づけ、ルーブリックによる評価を実施したことにより、目標の明確化と学びの言語化、成果の視覚化を図ることができた。その一方で、新たな課題が浮き彫りになった。

知立東小学校における授業実践では、授業の目標、内容、方法の有効性について、子どもの変容の観察、調査から明らかにするという、授業評価の改善があげられる。また、知立東小学校の教育方針や児童理解を深める事前学習をどのように「海外教育演習」のプログラムに位置づけるのかという点も課題である。

FWでは、「問い」を持つことの意味を受講生に適切に伝えるとともに、FWの過程で柔軟な活動と思考を促すことが課題である。また、「海外教育演習」のプログラムの中で、FWをどのように位置づけるのか、授業実践とFWの関連について明らかにする必要がある。

評価については、ルーブリックの規準と表現の難易度が高く、学生が理解して記述する際に混乱が見られたことから、今後規準を見直し、表現を改善する必要がある。また、「海外教育演習」のプログラムにおける自己評価の位置づけと時間の確保が課題となった。

2004年から毎年、愛教大と晋州教大の教員と学生は、膨大な時間と労力を費やして議論を積み重ね、準備に力を注ぎ、1週間の学生交流プログラムを実施している。なぜ、これほどまでして、このプログラムを継続させるのか。教員に必要な資質・能力の育成に本当に寄与しているのか。教育大学におけるカリキュラムのグローバル化を考える上で、意味のある実践となっているのか。私たちの「問い」はこれからも続いていく。愛教大と晋州教大の教員、学生とともに、今後も、真摯に「問い」に向き合い、全力で「応答」し続けたい。

【謝辞】

本授業を実施するにあたって、授業実践を受け入れてくださった知立東小学校、見学をさせていただいた奈良女子大学附属小学校の先生方、ホームステイを受け入れていただいたヒッポファミリークラブの皆さまには、大変お世話になりました。記して、お礼を申し上げます。また、本学生活科教育講座の中野真志先生には、奈良女子大学附属小学校の授業実践についての講義を引き受けていただき、有難うございました。

【注】

（1）本稿は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅳを山根、Ⅲ、Ⅵを真島、Ⅴを梅田が執筆し、最終的な調整を真島が行う形で執筆した。

（2）本授業の企画および実施は、科学研究費の助成に支えられている。（研究課題名：日韓の教員養成の大学生と児童・生徒への情報ネットのカリキュラムの研究　研究種目：基盤研究（B）　研究代表者：江島徹郎）

（3）愛知教育大学の授業名は「海外教育演習」、晋州教育大学の授業名は「姉妹大学教育実習」である。

（4）授業の目的について、力点を「多文化認識」に置くか、「学習者の自律的な活動」に置くかによって、授業担当者間でやや、立場の違いがある。授業の準備過程で、いわば「走りながら考えた」ため、この立場の違いの統一はしていない。「学習者の自律的活動」に力点を置く立場から、OECDの定義するコンピテンシーの三つのカテゴリー（①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自律的に行動する能力）との親和性が指摘された。今後の議論が必要である。

（5）受講生である晋州教大の学生だけでなく、愛教大の学生スタッフにも同様の評価シートの記入を依頼した。

【文献】

・江島徹郎・山根真理・上田崇仁・梅田恭子2009「『教育実習』を核とした日韓交流プログラムの発展―2008年度 愛知教育大学―晋州教育大学校の学生相互訪問を中心に―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第12号：99-106。

・ドニミク・S・ライチェン著、立田慶裕監訳2006『キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして』明石書店。

・真島聖子編2011『グローバル時代に育む関係性』愛知教育大学出版会。

・山根真理・江島徹郎・梅田恭子・孔泳泰・姜洪在2008「『教育実習』を核とした日韓交流プログラムの開発と実践―2007年度 愛知教育大学―晋州教育大学校の学生相互訪問を中心に―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第11号：47-53。

（2014年11月20日受理）